

# 源氏物語

## 明石卷

与謝野晶子訳





源氏物語

明石

紫式部

與謝野晶子訳

わりなくもわかれがたしとしら玉の涙  
をながす琴のいとかな  
(晶子)

まだ雨風はやまないし、雷鳴が始終することも同じで幾日かたつた。今は極度に侘<sup>わび</sup>しい須磨<sup>すま</sup>の人たちであつた。今日までのことも明日からのことも心細いことばかりで、源氏も冷静にはしていられなかつ

た。どうすればいいであろう、京へ帰ることもまだ免職になったまま  
で本官に復したわけでもなんでもないのであるから見苦しい結果を生  
むことになるであろうし、まだもつと深い山のほうへはいつてしまう  
ことも波風に威嚇いかくされて恐怖した行為だと人に見られ、後世に誤られ  
ることも堪えられないことであるからと源氏は煩悶はんもんしていた。このご  
ろの夢は怪しい者が来て誘おうとする初めの夜に見たのと同じ夢ばか  
りであつた。幾日も雲の切れ目がないような空ばかりをながめて暮ら  
していると京のことも気がかりになつて、自分という者はこうした心  
細い中で死んで行くのかと源氏は思われるのであるが、首だけでも外  
へ出すことのできない天気であつたから京へ使いの出しようもない。  
二条の院のほうからその中を人が来た。濡ぬれ鼠ねずみになつた使いである。

雨具で何重にも身を固めているから、途中で行き逢っても人間か何かわからぬ形をした、まず奇怪な者として追ひ払わなければならぬ下侍に親しみを感ずる点だけでも、自分はみじめな者になったと源氏はみずから思われた。夫人の手紙は、

申しようのない長雨は空までもなくしてしまうのではないかという気がしまして須磨の方角をながめることもできません。

浦風やいかに吹くらん思ひやる袖うち濡らし波間なき頃

というような身にしむことが数々書かれてある。開封した時からもう源氏の涙は潮時しおどきが来たような勢いで、内から湧わき上がってくる気が

したものであった。

「京でもこの雨風は天変だと申して、なんらかを暗示するものだとか解釈しておられるようでございます。仁王会にんおうえを宮中であそばすようなことも承っております。大官方が参内さんだいもできないのでございますから、政治も雨風のために中止の形でございます」

こんな話を、はかばかしくもなく下士級の頭で理解しているだけのことを言うのであるが、京のことに無関心でありえない源氏は、居間の近くへその男を呼び出していろいろな質問を試してみた。

「ただ例のような雨が少しの絶え間もなく降っております、その中に風も時々吹き出すというような日が幾日も続くのでございますから、それで皆様の御心配が始まったものだと思えます。今度のように

地の底までも通るような荒い雹ひょうが降ったり、雷鳴の静まらないことはこれまでにないことでございます」

などと言う男の表情にも深刻な恐怖の色の見えるのも源氏をより心細くさせた。

こんなことでこの世は滅んでいくのではないかと源氏は思っていたが、その翌日からまた大風が吹いて、海潮が満ち、高く立つ波の音は岩も山も崩くずしてしまふように響いた。雷鳴と電光のさすことの烈はげしくなったことは想像もできないほどである。この家へ雷が落ちそうにも近く鳴った。もう理智りちで物を見る人もなくなっていた。

「私はどんな罪を前生で犯してこうした悲しい目に逢あうのだろう。親たちにも逢えずかわいい妻子の顔も見ずに死なねばならぬとは」

こんなふうに出て来て歎く者がある。源氏は心を静めて、自分にはこの寂しい海辺で命を落とさねばならぬ罪業ざいごうはないわけであると自信するのであるが、ともかくも異常である天候のためにはいろいろの幣帛へいはくを神にささげて祈るほかかなかった。

「住吉すみよしの神、この付近の悪天候をお鎮めしずください。真実垂跡すいじやくの神でおいでになるのでしたら慈悲そのものであなたはいらっしゃるはずですから」

と源氏は言つて多くの大願を立てた。惟光これみつや良清よしきよらは、自身たちの命はともかくも源氏のような人が未曾有みぞうな不幸に終わってしまうことが大きな悲しみであることから、気を引き立てて、少し人心地ひとこころちのする者は皆命に代えて源氏を救おうと一所懸命になった。彼らは声を合わ



せて仏神に祈るのであった。

「帝王の深宮に育ちたまい、もろもろの歡樂に驕りたまいしが、絶大の愛を心に持ちたまい、慈悲をあまねく日本国じゅうに垂れたまい、不幸なる者を救いたまえること数を知らず、今何の報いにて風波の牲となりたまわん。この理を明らかにさせたまえ。罪なくして罪に当たり、官位を剥奪され、家を離れ、故郷を捨て、朝暮歎きに沈淪したもう。今またかかる悲しみを見て命の尽きなんとするは何事によるか、前生の報いか、この世の犯しか、神、仏、明らかにましまさばこの憂いを息めたまえ」

住吉の御社のほうへ向いてこう叫ぶ人々はさまざまの願を立てた。

また竜王をはじめ大海の諸神にも源氏は願を立てた。いよいよ雷鳴は

はげしくとどろいて源氏の居間に続いた廊へ落雷した。火が燃え上がって廊は焼けていく。人々は心も肝きもも皆失ったようになっていた。後ろのほうの廚くりやその他に使っている建物のほうへ源氏を移転させ、上下の者が皆いっしょにいて泣く声は一つの大きな音響を作って雷鳴にも劣らないのである。空は墨を磨すったように黒くなって日も暮れた。そのうち風が穏やかになり、雨が小降りになつて星の光も見えてきた。そうなるとこの人々は源氏の居場所があまりにもつたいなく思われて、寢殿のほうへ席を移そうとしたが、そこも焼け残った建物がさまざまに見え、座敷は多数の人間が逃げまわった時に踏みしだかれてあるし、御簾みすなども皆風に吹き落とされていた。今夜夜通しに後始末あとしまつをしてからのことに決めて、皆がそんなことに奔走している時、源氏

は心経しんぎようを唱えながら、静かに考えてみるとあわただしい一日であった。月が出てきて海潮の寄せた跡あとが顕あらわにながめられる。遠く退のいてもまだ寄せ返なみしする浪の荒い海へのほうを戸をあけて源氏はながめていた。今日までのこと明日からのことを意識していて、対策を講じ合うに足るような人は近い世界に絶無であると源氏は感じた。漁村の住民たちが貴人の居所を気にかけて、集まって来て訳のわからぬ言葉でしゃべり合っているのも礼儀のないことであるが、それを追ひ払う者すらない。

「あの大風がもうしばらくやまなかつたら、潮はもつと遠くへまで上つて、この辺なども形を残していまい。やはり神様のお助けじゃ」  
こんなことの言われているのも聞く身にとっては非常に心細いこと

であつた。

海にます神のたすけにかからずば潮の八百会やほあひにさすらへなまし

と源氏は口にした。終日風の揉もみ抜いた家にいたのであるから、源氏も疲労して思わず眠つた。ひどい場所であつたから、横になつたのではなく、ただ物によりかかつて見る夢に、お亡なくなりになつた院がはいつておいでになつたかと思うと、すぐそこへお立ちになつて、「どうしてこんなひどい所にいるか」

こうお言いになりながら、源氏の手を取って引き立てようとあそばされる。

「住吉の神が導いてくださるのについて、早くこの浦を去ってしまいがよい」

と仰せられる。源氏はうれしくて、

「陛下とお別れいたしましたからは、いろいろと悲しいことばかりがございますから私はもうこの海岸で死のうかと思えます」

「とんでもない。これはね、ただおまえが受けるちよつとしたことの報いにすぎないのだ。私は位にいる間に過失もなかったつもりであったが、犯した罪があつて、その罪の贖いつぐなをする間は忙せわしくてこの世を顧みる暇がなかったのだが、おまえが非常に不幸で、悲しんでいるのを見ると堪えられなくて、海の中を来たり、海べを通つたりまったく困ったがやっとここまで来ることができた。このついでに陛下へ申し

上げることがあるから、すぐに京へ行く」

と仰せになってそのまま行っておしまいになろうとした。源氏は悲しくて、

「私もお供してまいります」

と泣き入って、父帝のお顔を見上げようとした時に、人は見えないで、月の顔だけがきらきらとして前にあった。源氏は夢とは思われな  
いで、まだ名残がそこらに漂っているように思われた。空の雲が身に  
しむように動いてもいるのである。長い間夢の中で見ることもできな  
かった恋しい父帝をしばらくだけではあったが明瞭に見ることものでき  
た、そのお顔が面影に見えて、自分がこんなふう不幸の底に落ち  
て、生命も危うくなつたのを、助けるために遠い世界からおいでに

なつたのであらうと思ふと、よくあの騒ぎがあつたことであると、こんなことを源氏は思ふようになった。なんとなく力がついてきた。その時は胸がはつとした思ひでいっぱいになつて、現実の悲しいことも皆忘れていたが、夢の中でももう少しお話をすればよかつたと飽き足らぬ氣のする源氏は、もう一度続きの夢が見られるかとわざわざ寝入ろうとしたが、眠りえないままで夜明けになつた。

渚なぎさのほうに小さな船を寄せて、二、三人が源氏の家のほうへ歩いて来た。だれかと山莊の者が問うてみると、明石あかしの浦から前播磨守入道さきのはりまのかみが船で訪ねたずて来ていて、その使いとして来た者であつた。

「源少納言げんさんがいられましたら、お目にかかつて、お訪ねいたします理由を申し上げます」

と使いは入道の言葉を述べた。驚いていた良清は、よしきよ

「入道は播磨での知人で、ずっと以前から知っておりますが、私との間には双方で感情の害されていることがあって、格別に交際をつきあいしなくなっております。それが風波の害のあった際に何を言つて来たのでしょう」

と言つて訳がわからないふうであつた。源氏は昨夜の夢のことが胸中にあつて、

「早く逢あつてやれ」

と言つたので、良清は船へ行つて入道に面会した。よしきよ あんなにはげしい天気のとでどうして船が出されたのであらうと良清はまず不思議に思つた。



「この月一日の夜に見ました夢で異形いぎようの者からお告げを受けたのです。信じがたいこととは思いましたが、十三日が来れば明瞭になる、船の仕度したくをしておいて、必ず雨風がやんだら須磨の源氏の君の住居すまいへ行けというようなお告げがありましたから、試みに船の用意をして待っていますと、たいへんな雨風でしょう、そして雷でしょう、支那しななどでも夢の告げを信じてそれで国難を救うことができたりした例もあるのですから、こちら様ではお信じにならなくても、示しのあつた十三日にはこちらへ伺つてお話だけは申し上げようと思ひまして、船を出してみますと、特別なような風が細く、私の船だけを吹き送ってくれますような風でこちらへ着きました、やはり神様の御案内だつたと思います。何かこちらでも神の告げというようなことがなかった

でしようか、と申すことを失礼ですがあなたからお取り次ぎくださいませんか」

と入道は言うのである。良清はそつと源氏へこのことを伝えた。源氏は夢も現実も静かでなく、何かの暗示らしい点の多かつたことを思つて、世間の譏そしりなどばかりを氣にかけ神の冥助みようじよにそむくことをすれば、またこれ以上の苦しみを見る日が来るであろう、人間を怒らせることすら結果は相当に恐ろしいのである、氣の進まぬことも自分より年長者であつたり、上の地位にいる人の言葉には随したがうべきである。退いて咎とがなしと昔の賢人も言つた、あくまで謙遜けんそんであるべきである。もう自分は生命いのちの危あぶないほどの目を幾つも見せられた、臆病おくびようであつたと言われることを不名誉だと考える必要もない。夢の中でも父帝は住吉すみよし

の神のことを仰せられたのであるから、疑うことは一つも残っていないと思つて、源氏は明石へ居を移す決心をして、入道へ返辞を伝えさせた。

「知るべのない所へ来まして、いろいろな災厄さいやくにあつていまして、京のほうからは見舞いを言い送ってくれる者もありませんから、ただ大空の月日だけを昔馴染なじみ染の物と思つてながめているのですが、今日船を私のために寄せてくださつてありがとうございます。明石には私の隠栖いんせいに適した場所があるでしょうか」

入道は申し入れの受けられたことを非常によろこんで、恐縮の意を表してきた。ともかく夜が明けきらぬうちに船へお乗りになるがよいということになつて、例の四、五人だけが源氏を護まもつて乗船した。入

道の話のような清い涼しい風が吹いて来て、船は飛ぶように明石へ着いた。それはほんの短い時間のことであつたが不思議な海上の氣であつた。

明石の浦の風光は、源氏がかねて聞いていたように美しかった。ただ須磨に比べて住む人間の多いことだけが源氏の本意に反したことのようにである。入道の持っている土地は広くて、海岸のほうにも、山手のほうにも大きな邸宅があつた。渚なぎさには風流しやうていな小亭しょうていが作つてあり、山手のほうには、溪流けいりゅうに沿つた場所に、入道がこもつて後世ごせの祈りをする三昧堂さんまいどうがあつて、老後のために蓄積してある財物のための倉庫町もある。高潮を恐れてこのごろは娘その他の家族は山手の家のほうに移らせてあつたから、浜のほうの本邸に源氏一行は氣樂に住んでいるこ

とができるのであった。船から車に移るころにようやく朝日が上つて、ほのかに見ることのできた源氏の美貌びぼうに入道は老いを忘れることもでき、命も延びる気がした。満面に笑みえを見せてまず住吉の神をはるかに拝んだ。月と日を掌てのひらの中に得たような喜びをして、入道が源氏を大事がるのはもつともなことである。おのずから風景の明媚めいびな土地に、林泉の美が巧みに加えられた庭が座敷の周囲にあつた。入り江の水の姿の趣などは想像力の乏しい画家には描かけないであろうと思われた。須磨の家に比べるとここは非常に明るくて朗らかであつた。座敷の中の設備にも華奢かしやが尽くされてあつた。生活ぶりは都の大貴族と少しも変わっていないのである。それよりもまだ派手はでなところが見えないでもない。

明石へ移って来た初めの落ち着かぬ心が少しなおってから、源氏は京へ手紙を書いた。

「こんなことになるうとは知らずに来て、ここで死ぬ運命だった」  
などと言って、悲しんでいた京の使いが須磨にまだいたのを呼んで、過分な物を報酬に与えた上で、京でするいろいろの用が命ぜられた。頼みつけの祈りの僧たちや寺々へはこの間からのことが言いやられ、新たな祈りが依頼されたのである。私人には入道の宮へだけ、稀有にして命をまつとうした須磨の生活の終わりを源氏はお知らせした。二条の院の憐れな手紙の返事は一気には書かれずに、一章を書いた。泣き一章を書いては涙を拭きして書いている様子にも源氏がその人を感じる深さが見られるのであった。

あとへあとへと悲しいことが起こってきて、もう苦しい経験はし尽くしたような私ですからしきりに出家したい心も湧わきますが、鏡を見てもとお言いになったあなたの面影が目を離れないのですから、あなたに再会をしないでは、それを実行することもできません。何の苦しみよりも私にはあなたと離れている苦痛が最もつらいことに思われます。あなたにまた逢うことができれば、ほかのいとわしいことは皆忍んでいこうと思います。

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦より遠をちに浦づたひして

まだ夢の続きで、明石の浦にまで来ているような気がしてなりませ

ん。こんな時に書く手紙はまちがったこともあるでしょうが許してください。

正しくは書かれずに乱れ書きになっているような美しい手紙を、横から見ていて、源氏が二条の院の夫人を愛する深さをこれみつ惟光たちは思った。そうした人たちもわが家への音信をこの使いへ託した。あの晴れ間もないようだった天気は名残なごりなく晴れて、明石の浦の空は澄み返っていた。ここの漁業をする人たちは得意そうだった。須磨は寂しく静かで、漁師の家もまばらにしかなかったのである。最初ここへ来た時にはそれと変わった漁村のにぎやかに見えるのを、いとわしく思った源氏も、ここにはまた特殊ないろいろのよさのあるのが、発見されていて  
いって慰んでいた。



あるじ 主人の入道は信仰生活をする精神的な人物で、俗氣ぞうけのない愛すべき男であるが、溺愛できあいする一人娘のことでは、源氏の迷惑に思うことを知らずに、注意を引こうとする言葉もおりおり洩もらすのである。源氏もかねて興味を持って噂うわさを聞いていた女であつたから、こんな意外な土地へ来ることになつたのは、その人との前生の縁に引き寄せられていゝるのではないかとも思うことはあるが、こうした境遇にいる間は仏勤め以外のことに心をつかうまい。京の女王によおうに聞かれてもやましくくない生活をしているのとは違つて、そうなれば誓つてきたことも皆嘘うそにとられるのが恥ずかしいと思つて、入道の娘に求婚的な態度をとるようなことは絶対にしなかつた。何かのことに触れては平凡な娘ではなさそうであると心の動いて行くことはないのではなかつた。源氏のいる

所へは入道自身すら遠慮をしてあまり近づいて来ない。ずっと離れた  
仮屋建てのほうに詰めきっていた。心の中では美しい源氏を始終見て  
いたくてならないのである。ぜひ希望することを実現させたいと思つ  
て、いよいよ仏神を念じていた。年は六十くらいであるがきれいな老  
人で、仏勤めに痩<sup>や</sup>せて、もとの身柄のよいせいであるか、頑固<sup>がんこ</sup>な、そ  
してまた老いぼけたようなところもありながら、古典的な趣味がわ  
かっていて感じはきわめてよい。素養も相当にあることが何かの場合  
に見えるので、若い時に見聞したことを語らせて聞くことで源氏のつ  
れづれさも紛れることがあった。昔から公人として、私人として少し  
の閑暇<sup>ひま</sup>もない生活をしていた源氏であつたから、古い時代にあつた実  
話などをぼつぼつと少しずつ話してくれる老人のあることは珍重すべ

きであると思つた。この人に逢わなかつたら歴史の裏面にあつたようなことはわからないでしまったかもしれぬとまでおもしろく思われることも話の中にはあつた。こんなふうで入道は源氏に親しく扱われていたのであるが、この氣<sup>け</sup>高<sup>だか</sup>い貴人に対しては、以前はあんなに独<sup>ひと</sup>り決めをしていた入道ではあつても、無遠慮に娘の婿になつてほしいなどとは言い出せないのを、自身で齒がゆく思つては妻と二人で歎<sup>なげ</sup>いていた。娘自身も並み並みの男さえも見ることの稀<sup>まれ</sup>な田舎<sup>いなか</sup>に育つて、源氏を隙<sup>すき</sup>見した時から、こんな美貌<sup>びぼう</sup>を持つ人もこの世にはいるのであつたかと驚歎<sup>きようたん</sup>はしたが、それによつていよいよ自身とその人との懸隔<sup>けんかく</sup>を明瞭<sup>めいりやう</sup>に悟ることになつて、恋愛の対象などにすべきでないと思つていた。親たちが熱心にその成立を祈っているのを見聞きしては、不似合

いなことを思うものであると見ているのであるが、それとともに低い身のほどの悲しみを覚え始めた。

四月になった。衣がえの衣服、美しい夏の帳とばりなどを入道は自家で調製した。よけいなことをするものであるとも源氏は思うのであるが、入道の思い上がった人品に対しては何とも言えなかった。京からも始終そうした品物が届けられるのである。のどかな初夏の夕月夜に海上が広く明るく見渡される所において、源氏はこれを二条の院の月夜の池のように思われた。恋しい紫の女王によおうがいるはずでいてその人の影すらもない。ただ目の前にあるのは淡路あわじの島であった。「泡あわとはるかに見し月の」などと源氏は口ずさんでいた。

泡と見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

と歌ってから、源氏は久しく触れなかった琴を袋から出して、はかないふうに弾ひいていた。惟光これみつたちも源氏の心中を察して悲しんでいた。源氏は「広陵こうりょう」という曲を細やかに弾いているのであった。山手の家のほうへも松風と波の音に混じって聞こえてくる琴の音に若い女性たちは身にしむ思いを味わったことであろうと思われる。名手の弾く琴も何も聞き分けえられない土地の老人たちも、思わず外へとび出して来て浜風を引き歩いた。入道も供養法を修していたが、中止することにして、急いで源氏の居間へ来た。

「私は捨てた世の中がまた恋しくなるのではないかと思われますほ

ど、あなた様の琴の音で昔が思い出されます。また死後に参りたいと願っております世界もこんなのではないかという気もいたされる夜でございます」

入道は泣く泣くほめたたえていた。源氏自身も心に、おりおりの宮中の音楽の催し、その時のだれの琴、だれの笛、歌手を勤めた人の歌いぶり、いろいろ時々につけて自身の芸のもてはやされたこと、帝をはじめとして音楽の天才として周囲から自身に尊敬の寄せられたことなどについての追憶がこもこも起こってきて、今日は見がたい他の人も、不運な自身の今も深く思えば夢のような気ばかりがして、深刻な愁いを感じながら弾いているのであったから、すごい音楽といってよいものであった。老人は涙を流しながら、山手の家から琵琶と十三絃

の琴を取り寄せて、入道は琵琶法師然とした姿で、おもしろくて珍しい手をつつ弾いた。十三絃を源氏の前に置くと源氏はそれも少し弾いた。また入道は敬服してしまった。あまり上手がする音楽でなくとも場所場所で感じ深く思われることの多いものであるから、これははるかに広い月夜の海を前にして春秋の花紅葉もみじの盛りに劣らないいろいろの木々の若葉がそこに盛り上がっていて、そのまた陰影の地に落ちたところなどに水鶏くいなが戸をたたく音に似た声で鳴いているのもおもしろい庭も控えたこうした所で、優秀な楽器に対していることに源氏は興味を覚えて、

「この十三絃という物は、女が柔らかみをもつてあまり定きまらないふうに弾いたのが、おもしろくていいのです」

などと言っていた。源氏の意はただおおまかに女ということであつたが、入道は訳もなくうれしい言葉を聞きつけたように、笑みながら言う、

「あなた様があそばす以上におもしろい音を出しうるものがどこにございましょう。私は延喜えんぎの聖帝から伝わりまして三代目の芸を継いだ者でございしますが、不運な私は俗界のこととともに音楽もいったんは捨ててしまったのでございましたが、憂鬱ゆううつな気分になつております時などに時々弾いておりますのを、聞き覚えて弾きます子供が、どうしたのでございしますか私の祖父の親王によく似た音を出します。それは法師の僻耳ひがみみで、松風の音をそう感じているのかもしれませんが、一度お聞きに入りたいものでございます」



興奮して慄ふるえている入道は涙もこぼしているようである。

「松風が邪魔じゃまをしそうな所で、よくそんなにお稽古けいこができたものです  
ね、うらやましいことですよ」

源氏は琴を前へ押しやりながらまた言葉を続けた。

「不思議に昔から十三絃の琴には女の名手が多いようです。嵯峨さが帝の  
お伝によごえで女五みやの宮が名人でおありになったそうですが、その芸の系統  
は取り立てて続いていると思われる人が見受けられない。現在の上手じょうず  
というのは、ただちよつとその場きりな巧みさだけしかないようです  
が、ほんとうの上手がこんな所に隠されているとはおもしろいことで  
すね。ぜひお嬢さんのを聞かせていただきたいものです」

「お聞きくださいますのに何の御遠慮もいることではございません。」

おそばへお召しになりました。でも済むことでございます。潯陽江<sup>じんようこう</sup>では商

人のためにも名曲をかなでる人があつたのでございますから。そのまた琵琶と申す物はやつかいなものでございまして、昔にもあまり琵琶の名人という者はなかつたようでございますが、これも宅の娘はかなりすらすらと弾きこなします。品のよい手筋が見えるのでございます。どうしてその域に達しましたか。娘のそうした芸をただ荒い波の音が合奏してくるばかりの所へ置きますことは私として悲しいことに違いございませんが、不快なことのあつたりいたします節にはそれを聞いて心の慰めにいたすこともございます」

音楽通の自信があるような入道の言葉を、源氏はおもしろく思つて、今度は十三絃を入道に与えて弾かせた。実際入道は玄人<sup>くろうと</sup>らしく弾

く。現代では聞けないような手も出てきた。弾く指の運びに唐風が多く混じっているのである。左手でおさえて出す音などはことに深く出される。ここは伊勢いせの海ではないが「清き渚なぎさに貝や拾はん」という催さ馬楽いばらを美音の者に歌わせて、源氏自身も時々拍子を取り、声を添えることがあると、入道は琴を弾きながらそれをほめていた。珍しいふう  
に作られた菓子も席上に出て、人々には酒も勧められるのであったか  
ら、だれの旅愁も今夜は紛れてしまいそうであった。夜がふけて浜の  
風が涼しくなった。落ちようとする月が明るくなって、また静かな時  
に、入道は過去から現在までの身の上話をしだした。明石へ来たころ  
に苦勞のあったこと、出家を遂げた経路などを語る。娘のことも問わ  
ず語りにする。源氏はおかしくもあるが、さすがに身にしむ節ふしもある

のであった。

「申し上げにくいことではございますが、あなた様が思いがけなくこの土地へ、仮にもせよ移っておいになることになりましたのは、もしかいたしますと、長年の間老いた法師がお祈りいたしております神や仏が憐みあわれを一家におかけくださいます、それでしばらくこの僻地へきちへあなた様がおいでになったのではないかと思われます。その理由は住吉の神をお頼み申すことになりましたして十八年になるのでございます。女の子の小さい時から私は特別なお願いを起こしまして、毎年の春秋に子供を住吉へ参詣さんけいさせることにいたしております。また昼夜に六回の仏前のお勤めをいたしますのにも自分の極楽往生はさしおいて私はただこの子によい配偶者を与えたまえと祈っております。私自身

は前生の因縁が悪くて、こんな地方人に成り下がっておりますも、親は大臣にもなった人でございます。自分はこの地位に甘んじていても子はまたこれに準じたほどの者にしかねませんでは、孫、曾そう孫そんの末は何になることであろうと悲しんでおりましたが、この娘は小さい時から親に希望を持たせてくれました。どうかして京の貴人に娶めとっていただきたいと思ひます心から、私どもと同じ階級の者の間に反感を買い、敵を作りましたし、つらい目にもあわされましたが、私はそんなことを何とも思っておりません。命のある限りは微力でも親が保護をしよう、結婚をさせないまままで親が死ねば海へでも身を投げたてしまえと私は遺言がしてございます」

などと書き尽くせないほどのことを泣く泣く言うのであった。源氏

も涙ぐみながら聞いていた。

「冤罪えんざいのために、思いも寄らぬ国へ漂泊さまよって来ていますことを、前生に犯したどんな罪によってであるかとわからなく思っておりましたが、今晚のお話で考え合わせますと、深い因縁によってのことだったとはじめて気がつかれます。なぜ明瞭にわかっておいでになったあなたが早く言ってくださらなかったのでしょうか。京を出ました時から私はもう無常の世が悲しくて、信仰のこと以外には何も思わずに時を送っていました。いつかそれが習慣になって、若い男らしい望みも何もなくなっておりまして。今お話のようなお嬢さんのいられるということだけは聞いていましたが、罪人にされている私を不吉に思っているだろうと思ひまして希望もかけなかったのですが、それではお

許しくださるのですね、心細い独り<sup>ひと</sup>住みの心が慰められることでしょう」

などと源氏の言ってくれるのを入道は非常に喜んでいた。

「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうら寂しさを

私はまた長い間口へ出してお願ひすることができませんで悶々<sup>もんもん</sup>としておりました」

こう言うのに身は慄<sup>ふる</sup>わせているが、さすがに上品なところはあった。

「寂しいと言ってもあなたはもう法師生活に慣れていらっしやるので

すから」

それから、

旅衣うら悲しさにあかしかね草の枕は夢も結ばずまくら

戯談じょうたんまじりに言う、源氏にはまた平生入道の知らない愛嬌あいきょうが見えた。入道はないろいろと娘について言っていたが、読者はうるさいであろうから省いておく。まちがって書けばいっそう非常識な入道に見えるであろうから。

やつと思いがかなった気がして、涼しい心に入道はなっていた。その翌日の昼ごろに源氏は山手の家へ手紙を持たせてやることにした。



ある見識をもつ娘らしい、かえってこんなところに意外なすぐれた女  
がいるのかもしれないからと思つて、心づかいをしながら手紙を書い  
た。朝鮮紙の胡桃色くるみのものへきれいな字で書いた。

遠近をちこちもしらぬ雲井に眺めながわびかすめし宿の梢こずえをぞとふ

思うには。（思ふには忍ぶることぞ負けにける色に出いでじと思ひし  
ものを）

こんなものであつたようである。人知れずこの音信を待つために山  
手の家へ来ていた入道は、予期どおりに送られた手紙の使いを大騒ぎ  
してもてなした。娘は返事を容易に書かなかつた。娘の居間へはいっ

て行つて勧めても娘は父の言葉を聞き入れない。返事を書くのを恥ずかしくきまり悪く思われるのといつしよに、源氏の身分、自己の身分の比較される悲しみを心に持つて、気分が悪いと言つて横になつてしまった。これ以上勧められなくなつて入道は自身で返事を書いた。

もつたいたいお手紙を得ましたことで、過分な幸福をどう処置してよいかわからぬふうでございます。

それをこんなふうには見るのでございます。

眺むらん同じ雲井を眺むるは思ひも同じ思ひなるらん

だろうと私には思われます。柄にもない風流氣を私の出しましたこ

とをお許しください。

とあった。檀紙に古風ではあるが書き方に一つの風格のある字で書かれてあった。なるほど風流気を出したものであると源氏は入道を思い、返事を書かぬ娘には軽い反感が起こった。使いたいした贈り物を得て来たのである。翌日また源氏は書いた。

代筆のお返事などは必要がありません。

と書いて、

いぶせくも心に物を思ふかなやよやかにと問ふ人もなみ

言うことを許されないのですから。

うすよう

今度のは柔らかい薄様へはなやかに書いてやった。若い女がこれを感じに見てしまったと思われるのは残念であるが、その人は尊敬してもつりあぬ女であることを痛切に覚える自分を、さも相手らしく認めて手紙の送られることに涙ぐまれて返事を書く氣に娘はならないのを、入道に責められて、香のにおいの沁んだ紫の紙に、字を濃く淡くして紛らすようにして娘は書いた。

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか悩まん

きじよ

じょうず

手も書き方も京の貴女にあまり劣らないほど上手であつた。こんな女の手紙を見ていると京の生活が思い出されて源氏の心は楽しかった

が、続いて毎日手紙をやることも人目がうるさかったから、二、三日置きくらいに、寂しい夕方とか、物哀れな気のする夜明けとかに書いてはそつと送っていた。あちらからも返事は来た。相手をするに不足のない思い上がった娘であることがわかってきて、源氏の心は自然惹かれていくのであるが、良清が自身の縄張りなわばの中であるように言っていた女であつたから、今眼前横取りする形になることは彼にかわいそうであるとなお躊躇ちゆうちよはされた。あちらから積極的な態度をとってくれば良清への責任も少なくなるわけであるからと、そんなことも源氏は期待していたが女のほうは貴女と言われる階級の女以上に思い上がった性質であつたから、自分を卑しくして源氏に接近しようなどとは夢にも思わないのである。結局どちらが負けるかわからない。何ほども

遠くなつてはいないのであるが、ともかくも須磨の関が中にあることになつてからは、京の女王がいつそう恋しくて、どうすればいいことであろう、短期間の別れであるとも思つて捨てて来たことが残念で、そつとここへ迎えることを実現させてみようかと時々は思うのではあるが、しかしもうこの境遇に置かれていることも先の長いことと思われぬ今になつて、世間体のよろしくないことはやはり忍ぶほうがよいのであるとして、源氏はしいて恋しさをおさえていた。

この年は日本に天変地異ともいうべきことがいくつも現われてきた。三月十三日の雷雨の烈はげしかった夜、帝みかどの御夢に先帝が清涼殿きやうでんの階段はしの所へお立ちになつて、非常に御機嫌ごきげんの悪い顔つきでおにらみになつたので、帝がかしこまつておいでになると、先帝からはいろいろ

の仰せがあつた。それは多く源氏のことが申されたらしい。おさめになつたあとで帝は恐ろしく思召した。おぼしめまた御子として、他界におわしましてなお御心労を負わせられることが堪えられないことであると悲しく思召した。太后へお話しになると、

「雨などが降つて、天氣の荒れている夜などというものは、平生神経を悩ましていることが悪夢にもなつて見えるものですから、それに動かされたと外へ見えるようなことはなさらないほうがよい。軽々しく思われます」

と母君は申されるのであつた。おにらみになる父帝の目と視線をお合わせになつたためでか、帝は眼病におかかりになつて重くお煩いわづらになることになつた。御謹慎的な精進を宮中でもあそばすし、太后の宮

でもしておいでになった。また太政大臣が突然亡<sup>な</sup>くなった。もう高齢であつたから不思議でもないのであるが、そのことから不穏な空氣が世上に醸<sup>かも</sup>されていくことにもなつたし、太后も何ということなしに寝ついておしまいになつて、長く御平癒<sup>へいゆ</sup>のことがない。御衰弱が進んでいくことで帝は御心痛をあそばされた。

「私はやはり源氏の君が犯した罪もないのに、官位を剥奪<sup>はくだつ</sup>されているようなことは、われわれの上に報いてくることだろうと思います。どうしても本官に復させてやらねばなりません」

このことをたびたび帝は太后へ仰せになるのであつた。

「それは世間の非難を招くことですよ。罪を恐れて都を出て行つた人を、三年もたたないでお許しになつては天下の識者が何と言うでしょう



う」

などとお言いになって、太后はあくまでも源氏の復職に賛成をあそばさないまま月日がたち、帝と太后の御病気は依然としておよろしくないのであった。

明石ではまた秋の浦風の烈しく吹く季節になって、源氏もしみじみ独棲みの寂しさを感じるようであった。入道へ娘のことをおりおり言ひ出す源氏であった。

「目だたぬようにしてこちらの邸へよこさせてはどうですか」

こんなふうに言っていて、自分から娘の住居へ通って行くことなどはあるまじいことのように思っていた。女にはまたそうしたことできかない自尊心があった。田舎の並み並みの家の娘は、仮に来て住んで

いる京の人が誘惑すれば、そのまま軽率に情人にもなってしまうのであるが、自身の人格が尊重されてかかったことではないのであるから、そのあとで一生物思いをする女になるようなことはいやである。不つりあいの結婚をありがたいことのように思って、成り立たせようと心配している親たちも、自分が娘でいる間はいろいろな空想も作れていいわけなのであるが、そうなった時から親たちは別なつらい苦しみをするに違いない。源氏が明石に滞留している間だけ、自分は手紙を書きかわす女として許されるということがほんとうの幸福である。長い間噂うわさだけを聞いていて、いつの日にそうした方を隙見すきみすることができるだろうと、はるかなことに思っていた方が思いがけなくこの土地へおいでになって、隙見ではあったが顔を見ることができたし、

有名な琴の音を聞くこともかない、日常の御様子も詳しく聞くことができている、その上自分へお心をお語りになるような手紙も来る。もうこれ以上を自分は望みたくない。こんな田舎に生まれた娘にこれだけの幸いのあつたのは確かに果報のあつた自分と思わなければならな  
いと思つていたのであつて、源氏の情人になる夢などは見ていないのである。親たちは長い間祈つたことの事実になろうとする時になつたことを知りながら、結婚をさせて源氏の愛の得られなかつた時はどうだろうと、悲惨な結果も想像されて、どんなりっぱな方であつても、その時は恨めしいことであらうし、悲しいことでもある、目に見ることもない仏とか神とかいうものにばかり信頼していたが、それは源氏の心持ちも娘の運命も考えに入れずにしていたことであつたなど

と、今になって二の足が踏まれ、それについてする煩悶はんもんもはなはだしかった。源氏は、

「この秋の季節のうちにお嬢さんの音楽を聞かせてほしいものです。前から期待していたのですから」

などとよく入道に言っていた。入道はそつと婚姻の吉日を曆で調べさせて、まだ心の決まらないように言っている妻を無視して、弟子でしにも言わずに自身でいろいろと仕度したくをしていた。そうして娘のいる家の設備を美しく整えた。十三日の月がはなやかに上ったところに、ただ「あたら夜の」（月と花とを同じくば心知られん人に見せばや）とだけ書いた迎えの手紙を浜の館やかたの源氏の所へ持たせてやった。風流がちな男であると思ひながら源氏は直衣のうしをきれいに着かえて、夜がふけて

から出かけた。よい車も用意されてあったが、目だたせぬために馬で行くのである。惟光<sup>これみつ</sup>などばかりの一人二人の供をつれただけである。山手の家はやや遠く離れていた。途中の入り江の月夜の景色<sup>けしき</sup>が美しい。紫の女王<sup>によおう</sup>が源氏の心に恋しかった。この馬に乗ったまままで京へ行ってしまいたい気がした。

秋の夜の月毛<sup>こま</sup>の駒よ我が恋ふる雲井に駈<sup>か</sup>けれ時の間も見ん

と独言<sup>ひとりごと</sup>が出た。山手の家は林泉の美が浜の邸<sup>やしき</sup>にまさっていた。浜の館<sup>やかた</sup>は派手<sup>はで</sup>に作り、これは幽邃<sup>ゆうすい</sup>であることを主にしてあった。若い女のいる所としてはきわめて寂しい。こんな所においては人生のことが皆身

にしむことに思えるであろうと源氏は恋人に同情した。三昧堂が近く  
て、そこで鳴らす鐘の音が松風に響き合つて悲しい。岩にはえた松の  
形が皆よかつた。植え込みの中にはあらゆる秋の虫が集まつて鳴いて  
いるのである。源氏は邸内をしばらくあちらこちらと歩いてみた。娘  
の住居になつて<sup>すまい</sup>いる建物はことによく作られてあつた。月のさし込ん  
だ妻戸が少しばかり開かれてある。その縁へ上がつて、源氏は娘へ  
ものを言いかけた。これほどには接近して逢おうとは思わなかつた娘  
であるから、よそよそしくしか答えない。貴族らしく氣どる女であ  
る。もつとすぐれた身分の女でも今日までこの女に言い送つてあるほ  
どの熱情を見せれば、皆好意を表するものであると過去の経験から教  
えられている。この女は現在の自分を侮<sup>あなど</sup>つて見ているのではないかな

どと、焦慮の中には、こんなことも源氏は思われた。力で勝つことは初めからの本意でもない、女の心を動かすことができずに帰るのは見苦しいとも思う源氏が追い追いに熱してくる言葉などは、明石の浦でされることが少し場所違いでもつたいなく思われるものであつた。几帳の紐が動いて触れた時に、十三絃の琴の緒が鳴つた。それによつてさつきまで琴などを弾いていた若い女の美しい室内の生活ぶりが想像されて、源氏はますます熱していく。

「今音が少ししたようですね。琴だけでも私に聞かせてくださいませんか」

とも源氏は言つた。

むつ言を語りあはせん人もがなうき世の夢もなかば覺さむやと

明けぬ夜にやがてまどへる心には何れいづを夢と分わきて語らん

前のは源氏の歌で、あとのは女の答えたものである。ほのかに言う様子は伊勢いせの御息所みやすどころにそっくり似た人であつた。源氏がそこへはいつて来ようなどとは娘の予期しなかつたことであつたから、それが突然なことでもあつて、娘は立つて近い一つの部屋へはいつてしまった。そしてどうしたのか、戸はまたあけられないようにしてしまった。源氏はしいてはいろいろとする氣にもなつていなかつた。しかし源氏が躊躇ちゆうしたのはほんの一瞬間のことで、結局は行く所まで行つてしまったわけである。女はやや背が高くて、氣高けだかい様子の受け取れる人であつ



た。源氏自身の内にたいした衝動も受けていないでこうなったことも、前生の因縁であろうと思うと、そのことで愛が湧いてくるように思われた。源氏から見て近まさりのした恋と言ってよいのである。平生は苦しくばかり思われる秋の長夜もすぐ明けていく気がした。人に知らせたくないと思う心から、誠意のある約束をした源氏は朝にならぬうちに帰った。

その翌日は手紙を送るのに以前よりも人目がはばかれる気もした。源氏の心の鬼からである。入道のほうでも公然のことにはしたくなくて、結婚の第二日の使いも、そのこととして派手<sup>はで</sup>に扱うようなことはしなかった。こんなことにも娘の自尊心は傷つけられたようである。それ以後時々源氏は通って行った。少し道程<sup>みちのり</sup>のある所でもあった

から、土地の者の目につくことも思つて間を置くのであるが、女のほうではあらかじめ愁<sup>うれ</sup>えていたことが事実になつたように取つて、煩悶<sup>はんもん</sup>しているのを見ては親の入道も不安になつて、極樂の願いも忘れたように、仏勤めは怠<sup>なま</sup>けて、源氏の君の通つて来ることを大事だと考えている。入道からいえば事が成就しているのであるが、その境地で新しく物思ひをしているのが憐<sup>あわ</sup>れであつた。二条の院の女王<sup>にようう</sup>にこの噂<sup>うわさ</sup>が伝わつては、恋愛問題では嫉妬<sup>しつと</sup>する価値のあることでないとわかつていても、秘密にしておく自分の態度を恨めしがられては苦しくもあり、気恥ずかしくもあると思つていた源氏が紫夫人をどれほど愛しているかはこれだけでも想像することができるのである。女王も源氏を愛することの深いだけ、他の愛人との關係に不快な色を見せたそのおりお

りのことを今思い出して、なぜつまらぬことで恨めしい心にさせたかと、取り返したいくらいにそれを後悔している源氏なのである。新しい恋人は得ても女王へ焦こがれている心は慰められるものでもなかったから、平生よりもまた情けのこもった手紙を源氏は京へ書いたのであるが、奥に今度のことを書いた。

私は過去の自分のしたことではあるが、あなたを不快にさせたつまらぬいろいろな事件を思い出しては胸が苦しくなるのですが、それだのにまたここでよけいな夢の一つ見ました。この告白でどれだけあなたに隔てのない心を持っているかを思ってみてください。「誓ひしことも」（忘れじと誓ひしことをあやまたば三笠みかさの山の神もこ  
とわれ）という歌のように私は信じています。

と書いて、また、

何事も、

しほしほと先<sup>ま</sup>づぞ泣かるるかりそめのみるめは海<sup>あま</sup>人のすさびなれ  
ども

と書き添えた手紙であつた。

京の返事は無邪気な可<sup>かれん</sup>憐なものであつたが、それも奥に源氏の告白  
による感想が書かれてあつた。

お言いにならないではいらつしやれないほど現在のお心を占めてい  
ますことをお報<sup>し</sup>らせくさいまして承知いたしましたが、私には新

しい恋人に傾倒していらっしゃる御様子が昔のいろいろな場合と思  
い合わせて想像することもできます。

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

おおようではあるがくやしいと思う心も確かにかすめて書かれたも  
のであるのを、源氏は哀れに思った。この手紙を手から離しがたく  
じつとながめていた。この当座幾日は山手の家へ行く気もしなかつ  
た。女は長い途絶えを見て、この予感はずに初めからあったことで  
あると歎<sup>なげ</sup>いて、この親子の間では最後には海へ身を投げればよいとい  
う言葉が以前によく言われたものであるが、いよいよそうしたいほど

つらく思った。年取った親たちだけをたよりにして、いつ人並みの娘のような幸福が得られるものとも知れなかった過去は、今に比べて懊<sup>お</sup>悩<sup>のう</sup>の片はしも知らない自分だった。世の中のことはこんなに苦しいものなのであろうか、恋愛も結婚も処女の時に考えていたより悲しいものであると、女は心に思いながらも源氏には平静なふうを見せて、不快を買うような言動もしない。源氏の愛は月日とともに深くなっているのであるが、最愛の夫人が一人京に残っていて、今の女の間係をいろいろに想像すれば恨めしい心が動くことであらうと思われる苦しさから、浜の館<sup>やかた</sup>のほうで一人寝をする夜のほうが多かった。

源氏はいろいろに絵を描<sup>か</sup>いて、その時々的心を文章にしてつけていった。京の人に訴える気持ちで描いているのである。女王の返辞が

この絵巻から得られる期待で作られているのであった。感傷的な文学および絵画としてすぐれた作品である。どうして心が通じたのか二条の院の女王もものの身にしむ悲しい時々、同じようにいろいろの絵を描<sup>か</sup>いていた。そしてそれに自身の生活を日記のようにして書いていた。この二つの絵巻の内容は興味の多いものに違いない。

春になったが帝<sup>みかど</sup>に御悩<sup>ごのう</sup>があつて世間も静かでない。当帝の御子は右大臣<sup>むすめじようきようでん</sup>の女の承香殿の女御<sup>にようご</sup>の腹に皇子があつた。それはやっとお二つの方であつたから当然東宮<sup>みくらい</sup>へ御位はお譲りになるのであるが、朝廷の御後見をして政務を総括的に見る人物にだれを決めてよいかと帝はお考えになった末、源氏の君を不運の中に沈淪<sup>ちんりん</sup>させておいて、起用しないことは国家の損失であると思召<sup>おぼしめ</sup>して、太后が御反対になったにもか

わらず赦免の御沙汰が、源氏へ下ることになった。去年から太后も物<sup>もの</sup>怪<sup>のけ</sup>のために病んでおいでになり、そのほか天の諭<sup>さと</sup>しめいたことがしきりに起こることでもあったし、祈祷<sup>きとう</sup>と御精進<sup>しやうじん</sup>で一時およろしかった御眼疾もまたこのごろお悪くばかりなっていくことに心細く思召して、七月二十幾日に再度御沙汰<sup>ごさた</sup>があつて、京へ帰ることを源氏は命ぜられた。いずれはそうなることと源氏も期していたのではあるが、無常の人生であるから、それがまたどんな変わったことになるかもしれないと不安がないでもなかったのに、にわかな宣旨<sup>せんじ</sup>で帰洛<sup>きらく</sup>のことの決まつたのはうれしいことではあったが、明石<sup>あかし</sup>の浦を捨てて出ねばならぬことは相当に源氏を苦しませた。入道も当然であると思ひながらも、胸に蓋<sup>ふた</sup>がされたほど悲しい気持ちもするのであったが、源氏が都合よく



栄えねば自分のかねての理想は実現されないのであるからと思ひ直した。

その時分は毎夜山手の家へ通う源氏であつた。今年の六月ごろから女は妊娠していた。別離の近づくことによつてあやなくなつてもよいように源氏は女を深く好きになつた。どこまでも恋の苦から離れられない自分なのであらうと源氏は煩悶はんもんしていた。女はもとより思ひ乱れていた。もつともなことである。思ひがけぬ旅に京は捨ててもまた帰る日のないことなどは源氏の思ひなかつたことであつた。慰める所がそれにはあつた。今度は幸福な都へ帰るのであつて、この土地との縁はこれで終わると思ひねばならないと思つと、源氏は物哀れでならなかつた。侍臣たちにも幸運は分かたれていて、だれもおどる心を

持っていた。京の迎えの人たちもその日からすぐに下って来た者が多数にあつて、それらも皆人生が楽しくばかり思われるふうであるのに、主人の入道だけは泣いてばかりいた。そして七月が八月になった。色の身にしむ秋の空をながめて、自分は今も昔も恋愛のために絶えない苦を負わされる、思い死にもしなければならぬようにと源氏は思い悶もだえていた。女との関係を知っている者は、

「反感が起こるよ。例のお癖だね」

と言つて、困つたことだと思つていた。源氏が長い間この関係を秘密にしている、人目を紛らして通つていたことが近ごろになつて人々にわかつたのであつたから、

「女からいえば一生の物思いを背負い込んだようなものだ」

とも言ったりした。少納言がよく話していた女であるともその連中が言っていた時、良清は少しくやさしかった。

出発が明後日に近づいた夜、いつもよりは早く山手の家へ源氏は出かけた。まだはつきりとは今日までよく見なかった女は、貴女らしいきじょ気高い様子が見えて、この身分にふさわしくない端麗さが備わっていた。捨てて行きがたい気がして、源氏はなんらかの形式で京へ迎えようという気になったのであった。そんなふうに言つて女を慰めていた。女からもつくづくと源氏の見られるのも今夜がはじめてであった。長い苦勞のあとは源氏の顔に瘦せやが見えるのであるが、それがまた言いようもなく艶えんであつた。あふれるような愛を持つて、涙ぐみながら将来の約束を女にする源氏を見ては、これだけの幸福をうければ

もうこの上を願わないであきらめることもできるはずであると思われるのであるが、女は源氏が美しければ美しいだけ自身の価値の低さが思われて悲しいのであった。秋風の中で聞く時にことに寂しい波の音がする。塩を焼く煙がうつすり空の前に浮かんでいて、感傷的にならざるをえない風景がそこにはあった。

このたびは立ち別るとも藻塩もしほ焼く煙は同じ方かたになびかん

と源氏が言うと、

かきつめて海人あまの焼く藻もの思ひにも今はかひなき恨みだにせじ

とだけ言つて、可憐なふう<sup>かれん</sup>に泣いていて多くは言わないのであるが、源氏に時々答える言葉には情のこまやかさが見えた。源氏が始終聞きたく思つていた琴を今日まで女の弾<sup>ひ</sup>こうとしなかったことを言つて源氏は恨んだ。

「ではあとであなたに思い出してもらうために私も弾くことにしよう」

と源氏は、京から持つて来た琴を浜の家へ取りにやつて、すぐれたむずかしい曲の一節を弾いた。深夜の澄んだ気の中であつたから、非常に美しく聞こえた。入道は感動して、娘へも促すように自身で十三絃の琴を几帳<sup>きちよう</sup>の中へ差し入れた。女もとめどなく流れる涙に誘われたように、低い音で弾き出した。きわめて上手<sup>じょうず</sup>である。入道の宮の十三

絃の技は現今第一であると思うのは、はなやかにきれいな音で、聞  
者の心も朗らかになつて、弾き手の美しさも目に髣髴ほうふつと描かれる点な  
どが非常な名手と思われる点である。これはあくまでも澄み切った芸  
で、眞の音楽として批判すれば一段上の技倆ぎりようがあるとも言えると、こ  
んなふうには源氏は思った。源氏のような音楽の天才である人が、はじ  
めて味わう妙味であると思うような手もあつた。飽満するまでには聞  
かせずにやめてしまったのであるが、源氏はなぜ今日までにしいても  
弾かせなかつたかと残念でならない。熱情をこめた言葉で源氏はいろ  
いろに将来を誓つた。

「この琴はまた二人で合わせて弾く日まで形見にあげておきまし  
う」

と源氏が琴のことを言うと、女は、

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音<sup>ね</sup>にやかけてしのばん

言うともなくこう言うのを、源氏は恨んで、

逢<sup>あ</sup>ふまでのかたみに契る中の緒<sup>を</sup>のしらべはことに変はらざらなん

と言ったが、なおこの琴の調子が狂わない間に必ず逢おうとも言いなだめていた。信頼はしていても目の前の別れがただただ女には悲しいのである。もつともなことと言わねばならない。

もう出立の朝になって、しかも迎えの人たちもおおぜい来ている騒ぎの中に、時間と人目を盗んで源氏は女へ書き送った。

うち捨てて立つも悲しき浦波の名残なごりいかにと思ひやるかな

返事、

年経つる苦屋とまやも荒れてうき波の帰る方にや身をたぐへまし

これは実感そのまま書いただけの歌であるが、手紙をながめている源氏はほろほろと涙をこぼしていた。女の間係を知らない人々はこん



な住居すまいも、一年以上いられて別れて行く時は名残があれほど惜しまれるものなのであらうと単純に同情していた。良清などはよほどお気に入った女なのであらうと憎く思った。侍臣たちは心中のうれしさをおさえて、今日限りに立って行く明石の浦との別れに湿っぽい歌を作りもしていたが、それは省いておく。

出立の日の饗応きようおうを入道はでは派手に設けた。全体の人へ饒別せんべつにりっぱな旅装そろ一揃いずつを出すこともした。いつの間にこの用意がされたのであるかと驚くばかりであった。源氏の衣服はもとより質を精選して調製してあった。幾個かの衣櫃ころもびつが列に加わって行くことになっているのである。今日着て行く狩衣かりぎぬの一所に女の歌が、

寄る波にたち重ねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん

と書かれてあるのを見つけて、立ちぎわではあったが源氏は返事を書いた。

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

というのである。

「せっかくよこしたのだから」

と言いながらそれに着かえた。今まで着ていた衣服は女の所へやつた。思い出させる恋の技巧というものである。自身のおいの沁しんだ

着物がどれだけ有効な物であるかを源氏はよく知っていた。

「もう捨てました世の中ですが、今日のお送りのできませんことだけは残念です」

などと言っている入道が、両手で涙を隠しているのがかわいそうである。と源氏は思ったが、他の若い人たちの目にはおかしかつたに違いない。

「世をうみにこころしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね

子供への申しわけにせめて国境まではお供をさせていただきます」

と入道は言ってから、

「出すぎた申し分でございますが、思い出しておやりくださいます時がございましたら御音信をいただかせてくださいませ」

などと頼んだ。悲しそうで目のあたりの赤くなっている源氏の顔が美しかった。

「私には当然の義務であることもありますから、決して不人情な者でないとすぐにまたよく思っていたくような日もあるでしょう。私はただこの家と離れることが名残惜なごりしくてならない、どうすればいいことなんだか」

と言つて、

都出いでし春の歎なげきに劣らめや年ふる浦を別れぬる秋

と涙を袖そでで源氏は拭ぬぐっていた。これを見ると入道は氣も遠くなつたように萎しおれてしまった。それきり起居たちいもよろよるとするふうである。明石の君の心は悲しみに満たされていた。外へは現わすまいとするのであるが、自身の薄倖はっこうであることが悲しみの根本になつていて、捨てて行く恨めしい源氏がまた恋しい面影になつて見えるせつなさは、泣いて僅もかに洩もらすほかはどうしようもない。母の夫人もなだめかねていた。

「どうしてこんなに苦勞の多い結婚をさせたらう。固意かたいじ地な方の言いなりに私までもがついて行つたのがまちがいだった」

と夫人は歎息たんそくしていた。

「うるさい、これきりにあそばされないことも残っているのだから、

お考えがあるに違いない。湯でも飲んでまあ落ち着きなさい。ああ苦しいことが起こってきた」

入道はこう妻と娘に言つたままで、室の片隅かたすみに寄つていた。妻と乳母めのとが口々に入道を批難した。

「お嬢様を御幸福な方にしてお見上げしたいと、どんなに長い間祈つて来たことでしょう。いよいよそれが実現されますことかと存じておりましたのに、お気の毒な御経験をあそばすことになったのでございますね。最初の御結婚で」

こう言つて歎なげく人たちもかわいそうに思われて、そんなこと、こんなことで入道の心は前よりずっとぼけていった。昼は終日寝ているかと思うと、夜は起き出して行く。

「数珠じゆずの置き所も知れなくしてしまった」

と両手を擦すり合わせて絶望的な歎息たんそくをしているのであった。弟子たちでしに批難ひなんされては月夜みづよに出て御堂みどうの行道ぎやうどうをするが池いけに落ちてしまう。風流ふうりゅうに作った庭にわの岩角いわかどに腰こしをおろしそこねて怪我けがをした時には、その痛みいたみのある間まだけ煩悶はんもんをせずにいた。

源氏げんじは浪速なにわに船ふねを着けて、そこで祓はらいをした。住吉すみよしの神かみへも無事に帰洛きらくの日の来た報告ほうこくをして、幾つかの願がんを実行じっぎんしようと思おもう意志いしのあることも使いに言いわせた。自身みづかみは参詣さんけいしなかった。途中とちゆうの見物けんぶつなどもせずにすぐに京きやうへはいったのであった。

二条の院ふたじょうのいんへ着いた一行いっけうの人々と京きやうにいた人々は夢心地ゆめごころちで逢あい、夢心地ゆめごころちで話わが取りかわされた。喜び泣なきの声こゑも騒さわがしい二条の院ふたじょうのいんであつ

た。紫夫人も生きがいなく思っていた命が、今日まであつて、源氏を迎ええたことに満足したことであろうと思われる。美しかった人のさらに完成された姿を二年半の時間ののちに源氏は見ることができたのである。寂しく暮らした間に、あまりに多かつた髪の量の少し減つたまでもがこの人をより美しく思わせた。こうしてこの人と永久に住む家へ歸つて來ることができたのであると、源氏の心の落ち着いたのとともに、またも別離を悲しんだ明石の女がかわいそうに思いやられた。源氏は恋愛の苦にどこまでもつきまとわれる人のようである。源氏は夫人に明石の君のことを話した。女王はどう感じたか、恨みを言うともなしに「身をば思はず」（忘らるる身をば思はず誓ひてし人命の惜しくもあるかな）などとはかなそうに言っているのを、美しい



とも可憐かれんであるとも源氏は思った。見ても見ても見飽かぬこの人と別れ別れにいるようなことは何がさせたかと思うと今さらまた恨めしかった。

間もなく源氏は本官に復した上、権大納言ごんだいなごんも兼ねる辞令を得た。侍臣たちの官位もそれぞれ元にかえされたのである。枯れた木に春の芽が出たようなめでたいことである。

お召しがあつて源氏は参内した。お常御殿に上がると、源氏のさらに美しくなつた姿をあれで田舎住いなかまいを長くしておいでになつたのかと人は驚いた。前代から宮中に奉仕していて、年を取つた女房などは、悲しがつて今さらまた泣き騒いでいた。帝みかども源氏にお逢いになるのを晴れがましく思召おぼしめされて、お身なりなどをことにきれいにあそば

してお出ましになった。ずっと御病気でお待ちしておりますために、衰弱が御見えになるのであるが、昨今になって陛下の御気分はおよろしかった。しめやかにお話をあそばすうちに夜になった。十五夜の月の美しく静かなもとで昔をお忍びになって帝はお心をしめらせておいでになった。お心細い御様子である。

「音楽をやらせることも近ごろはない。あなたの琴の音もずいぶん長く聞かなんだね」

と仰せられた時、

わたつみに沈みうらぶれひるの子の足立たざりし年は経にけり

と源氏が申し上げると、帝は兄君らしい憐みと、君主としての過失をみずからお認めになる情を優しくお見せになつて、

宮ばしらめぐり逢ひける時しあれば別れし春の恨み残すな

と仰せられた。艶えんな御様子であつた。

源氏は院の御為おんために法華經ほけきようの八講を行なう準備をさせていた。

東宮にお目にかかる、ずつとお身大きくなつておいでになつて、

珍しい源氏の出仕をお喜びになるのを、限りもなくおかわいそうに源

氏は思った。学問もよくおできになつて、御位みくらいにおつきになつてもさ

しつかえはないと思われるほど御聰明そうめいであることがうかがわれた。少

し日がたつて気の落ち着いたところに御訪問した入道の宮でも、感慨無量な御会談があつたはずである。

源氏は明石から送つて来た使いに手紙を持たせて歸した。夫人にはばかりながらこまやかな情を女に書き送つたのである。

毎夜毎夜悲しく思っているのですか、

歎きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

こんな内容であつた。

大貳だいにの娘ごせちの五節は、一人でしていた心の苦も解消したように喜んで、

どこからとも言わせない使いを出して、二条の院へ歌を置かせ

た。

須磨の浦に心を寄せし船人のやがて朽<sup>く</sup>たせる袖<sup>そで</sup>を見せばや

字は以前よりずっと上手<sup>じょうず</sup>になっっているが、五節に違いないと源氏は  
思つて返事を送つた。

かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残<sup>なごり</sup>に袖の乾<sup>ひ</sup>がたかりしを

源氏はずいぶん好きであつた女であるから、誘いかけた手紙を見て  
は訪ねたい気がしきりにするのであるが、当分は不謹慎なこともでき

はなちるさと

ないように思われた。花散里などへも手紙を送るだけで、逢いには行こうとしないのであったから、かえって京に源氏のいなかったころよりも寂しく思っていた。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---